患者さんは命がけで病院に来る その思いにプロのチームで応える

大学の実習で周産期医療の道へ

産婦人科医の仕事を描いた人気マンガ『コウノドリ』。昨年秋にはドラマ化され、毎回楽しみに見ていた方も多かったのではないでしょうか。このモデルとなった産婦人科医、荻田和秀先生は、香川大学医学部の前身、香川医科大学の卒業生です。

大学時代の思い出を聞くと「よく寝ていたので、友人にヤマネと呼ばれていました」と笑う荻田先生ですが、日本の救命救急制度を創設した一人である当時の副学長の講義には非常に感銘を受けたそう。脳外科の救急医を考えていた大学5年時、産婦人科実習で緊急手術や搬送を目の当たりにし「これも救急のひとつだ」と思ったことから、卒業後は周産期医療の道に進みます。

現場では患者の気持ちに寄り添う医師として厚く信頼される存在。

「昔、先輩医師に『手術がうまくなりたいか?』と聞かれたことがあります。『なりたい』と答えると『手術だけがうまくなるのでは足りない』と。手術と話術、つまり患者さんの気持ちに沿って話ができて、初めて施術なんだと」。

患者さんと医師を守るチーム医療

どんなにリスクを抱えた妊婦さんでも受け入れられるよう、荻田医師は外科や麻酔科など他の専門医ともチームを組んで医療にあたります。

「それぞれの専門医が集まれば自分の仕事にめいっぱい集中でき、患者さんを全体的に診ることができます。同時に医師も誤謬のリスクを減らせます」。

リスクを分散させ医療の質を高めるこの方法は、産科医が減りつつある現状を何とかしたいと考えた荻田先生のひとつの解。チームは毎術後に振り返りを行い次に備えます。いつでもどこでも誰とでも、どんな状況でも対応できるのがプロ。先生も毎日、納得する仕事ができたかを眠りにつく前に考えるのだそうです。

やりたいことは走りながら見つける

プロの仕事といえば『コウノドリ』も先生を驚かせました。マンガは熱心な取材と医学的な正しさを元に描かれた真摯な作品。ドラマの制作現場も同様で、人物設定やセリフなどへのこだわりは強く、見れば見るほど発見がある凝ったストーリー展開。先生もドラマを見ながら泣いてしまったそうです。

最後に若い皆さんへのメッセージをお願いしました。

「医療は人を満足させる仕事。目指す方は思いっきり人の目を気にしてください。見た目もですが、話す内容や話し方も大事です」。

やりたいことを探している方には?

「走りながら見つけたらいいのではと思います。目指す先が途中で変わる可能性もあります。それに応じて走り方、生き方を変えられる人になってほしい」。

「患者さんは命がけで病院に来ています。医療は命をやり取りする場だから、平均以上の仕事を踏ん張ってやり遂げます。自分が求められていることは何かを考えて、人を満足させるために自分が変わってもいいですよね」。

誰一人として同じではない命の現場で、真剣かつ柔軟に患者さんにとっての最善を考える。荻田先生の信念を感じる言葉です。

りんくう総合医療センター産婦人科を支えるチームメンバーと共に。

大好きなピアノは病院のイベントや講演会で披露されることも。

泉州広域母子医療センター長
りんくう総合医療センター産婦人科部長

荻田 和秀

Kazuhide Ogita

おぎた　かずひで

1966年生まれ、大阪府出身。1992年香川医科大学卒。大阪府警察病院、大阪府立母子保健総合医療センター、大阪大学医学部博士課程進学を経て現職。産婦人科医でありジャズピアニストでもある異色の経歴、赤ちゃんとお母さんの命に向き合う姿は、マンガとテレビドラマ『コウノドリ』のモデルとしても知られる。